



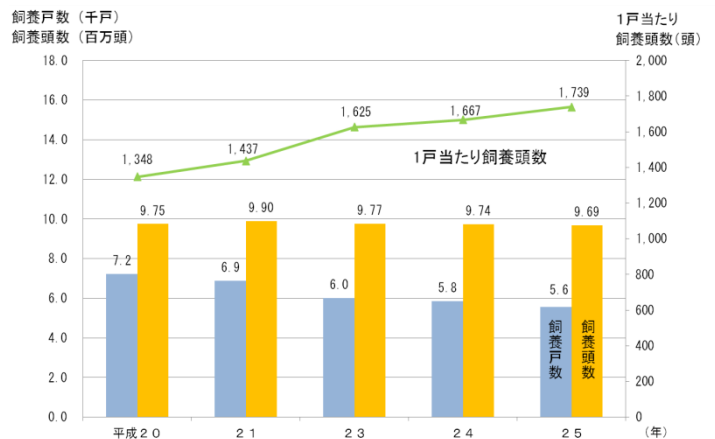
豚肉

◆飼養動向

25年2月現在の1戸当たり飼養頭数、4.3%増加

飼養戸数は減少傾向となっており、25年は5,570戸(前年比4.6%減)とやや減少した。飼養頭数は、飼養戸数に比べ減少幅は小さいものの、21年以降減少しており、25年も968万5000頭(同0.5%減)とわずかに減少した。この結果、1戸当たり飼養頭数は1,739頭(同4.3%増)とやや増加し、依然として規模拡大傾向が続いている(図1)。

図1 豚の飼養戸数および飼養頭数



資料：農林水産省「畜産統計」

注1：各年2月1日現在

2：22年は世界農林業センサスの調査年のためデータがない

◆生産

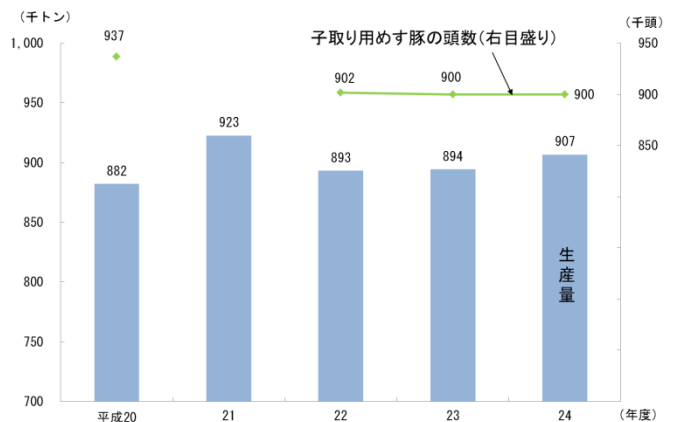
24年度の生産量、1.4%増加

22年度の豚肉生産量は、宮崎県における口蹄疫の発生や記録的猛暑の影響による出荷頭数の減少から、89万3200トン(前年度比3.2%減)と3年ぶりに減少した。

23年度は、前半は、前年の猛暑による受胎率の低下から、と畜頭数が減少傾向で推移したものの、8月以降、受胎率低下の影響が解消され、と畜頭数は増加傾向で推移した結果、前年並みの89万4300トン(同0.1%増)となった。

24年度は、猛暑および残暑の影響はあったものの、大規模農家による規模拡大に伴う増頭などにより、90万7100トン(同1.4%増)とわずかに増加した(図2)。

図2 豚肉生産量と子取り用めす豚の頭数



資料：農林水産省「畜産統計」、「食肉流通統計」

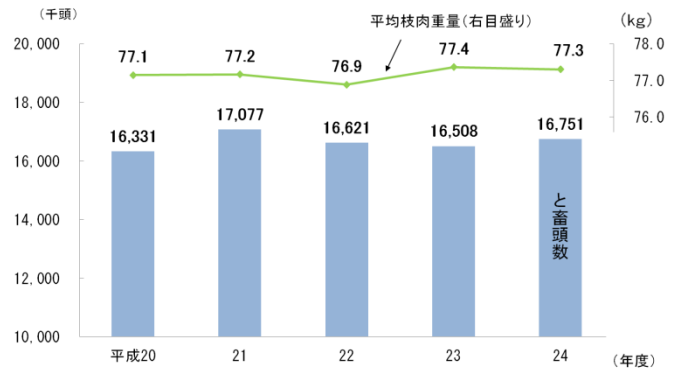
注1：生産量は、部分肉ベース

2：子取り用めす豚の頭数は、各年度2月1日現在。21年度(22年2月1日現在)は世界農林業センサスの調査年のためデータがない

24年度の豚のと畜頭数は、猛暑および残暑の影響はあったものの、大規模農家による規模拡大に伴う増頭などにより、年度全体では1675万1300頭(同1.5%増)とわずかに増加した。

また、平均枝肉重量は、22年度は、記録的猛暑の影響により4年ぶりに減少した。23年度は、1頭当たり77.4キログラムと回復したものの、24年度は同77.3キログラムと、前年並みであった(図3)。

図3 豚のと畜頭数と平均枝肉重量



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：平均枝肉重量は全国平均

◆輸入

24年度の豚肉輸入量、5.4%減少

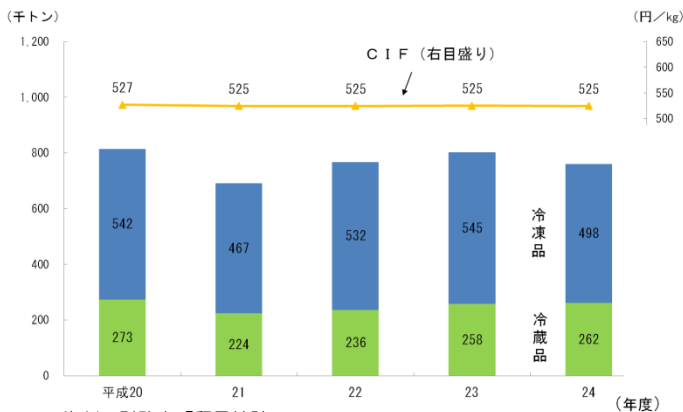
豚肉

22年度の豚肉の輸入量は、国内生産量が減少したことなどから増加した。23年度は、東日本大震災後の豚肉加工品需要の高まりなどから80万2800トン(前年度比4.5%増)と2年連続で増加した。

24年度は、通関審査の充実化、為替相場の円安傾向などから冷凍品が減少した結果、75万9700トン(同5.4%減)とやや減少した(図4)。

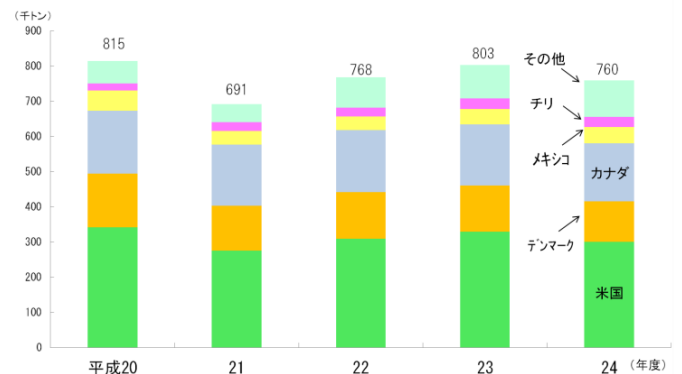
24年度の国別輸入量は、輸入申告に係る審査・検査の充実化、為替相場の円安傾向などから、メキシコを除き、主要国では総じて前年から減少した。内訳をみると、米国産は30万トン(同9.0%減)、カナダ産は16万5500トン(同5.1%減)、デンマーク産は11万5100トン(同12.3%減)、メキシコ産は4万6200トン(同6.7%増)、チリ産は2万9000トン(同1.3%減)となった(図5)。

図4 豚肉の冷蔵品、冷凍品別輸入量とCIF価格



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース

図5 豚肉の国別輸入量



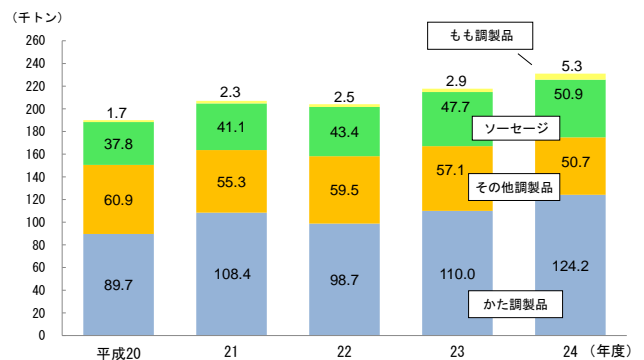
資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース

豚肉調製品・ソーセージ

豚肉調製品(豚の肉またはくず肉のみから成るものを除く。)やソーセージの輸入量は、21年度は、安価な輸入豚肉調製品への需要が高まったことから増加した。22年度は、ソーセージは増加したものの、かた調製品がかなりの程度減少したため、全体では減少した。23年度は、東日本大震災後の豚肉加工品需要の高まりなどもあり、豚肉調製品・ソーセージともに増加し、合計では21万8000トン(前年度比6.7%増)とかなりの程度増加した。

24年度は、輸入申告に係る審査・検査の充実化に伴う冷凍豚肉の輸入量減少に伴い、調製品、ソーセージともに増加し、合計では23万1000トン(同6.1%増)とかなりの程度増加した(図6)。

図6 豚肉調製品およびソーセージの輸入量



資料：財務省「貿易統計」
 注：もも調製品：1602-41-090
 かた調製品：1602-42-090
 その他調製品：1602-49-290
 ソーセージ：1601-00-000

◆消費

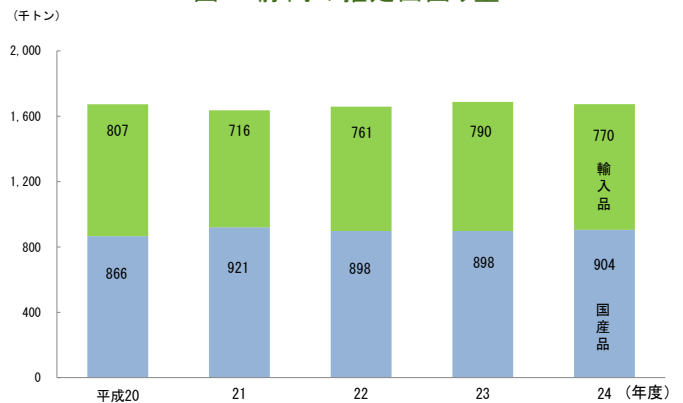
24年度の推定出回り量は0.8%減少、家計消費は0.4%減少

推定出回り量

豚肉の推定出回り量は、22年度は、生産量は減少したものの、輸入量の増加により、2年ぶりに増加した。23年度は、国産品は前年並みであったが、輸入品は2年連続で増加した。

24年度は、国産品は90万4400トン(前年度比0.7%増)とわずかに増加した一方、輸入品は輸入申告に係る審査・検査の充実化に伴う輸入量減少に伴い77万200トン(同2.5%減)とわずかに減少し、全体では、167万4600トン(同0.8%減)とわずかに減少した(図7)。

図7 豚肉の推定出回り量



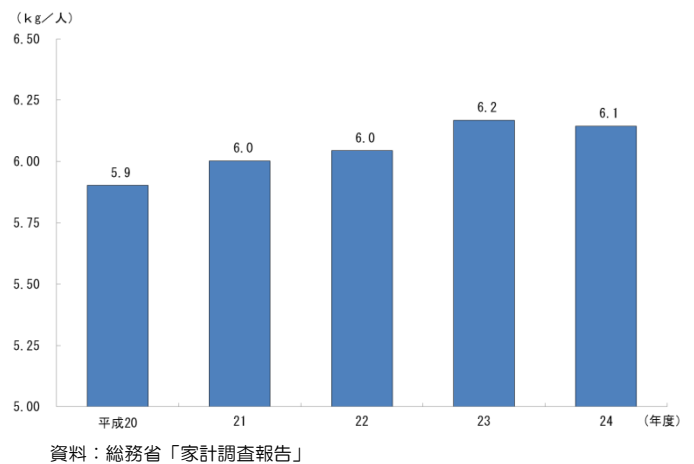
資料：農林水産省「食肉流通統計」、財務省「貿易統計」、
 農畜産業振興機構調べ
 注：部分肉ベース

家計消費

豚肉の家計消費量は、23年度は、放射性セシウム検出に伴う風評被害により消費が減少した牛肉からの代替需要などから、1人当たり6.2キログラム(前年度比2.0%増)とわずかに増加した。

24年度は、前年度には及ばなかったものの、同6.1キログラム(同0.4%減)と、高い水準が継続した(図8)。

図8 豚肉の家計消費量(1人当たり)



◆在庫

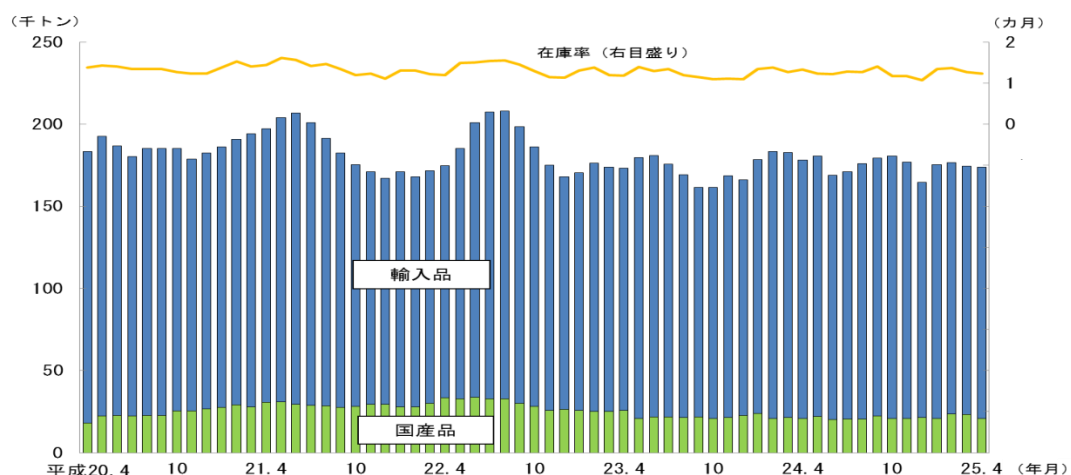
24年度の推定期末在庫量、4.5%減少

豚肉の推定期末在庫量は、高水準であった20年度から取り崩しが進み、21年度末の在庫量は、17万1800トン(前年度比11.5%減)とかなり大きく減少した。22年度は、夏場にかけて輸入量が増加したため、17万3900トン(同1.2%増)とわずかに増加した。23年度も、輸入量の増加から積み増しが進み、18万2800トン(同5.1%増)とやや増加

した。24年度は、国産品が生産量の増加により積み増される一方、輸入品は、輸入量の減少に伴い取り崩しが進み、17万4600トン(同4.5%減)とやや減少した。

なお、24年度の在庫率は、1.1~1.4カ月の間で推移した(図9)。

図9 豚肉推定期末在庫量と在庫率



資料：農畜産業振興機構調べ
 注1：在庫率=在庫量/推定出回り量
 2：部分肉ベース

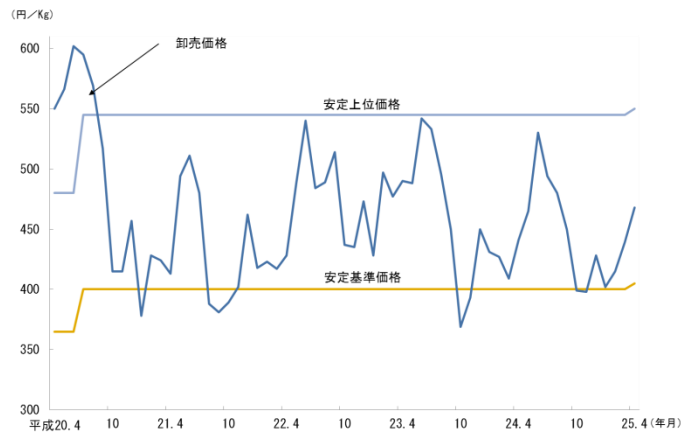
◆枝肉卸売価格

24年度の枝肉卸売価格、11円安のキログラム当たり446円

豚枝肉の卸売価格(東京・省令規格)は、21年秋に300円台後半まで値を下げた。このため、畜産業振興事業による調整保管が6年ぶりに実施された。22年度は、口蹄疫の発生、記録的猛暑の影響で出荷頭数が減少したことなどから、前年度を上回る価格で推移した。23年度前半は、22年夏場の猛暑による受胎率の低下に伴う出荷頭数減少、牛肉からの代替需要もあり、卸売価格は前年を上回って推移した。しかし後半になると、出荷頭数、輸入量の増加から、卸売価格は前年を下回った。

24年度は、輸入量の減少に伴う代替需要があったものの、出荷頭数の増加などにより、卸売価格はキログラム当たり446円(前年度比2.4%安)と、前年度をわずかに下回った(図10)。

図10 豚枝肉の卸売価格(東京・省令)



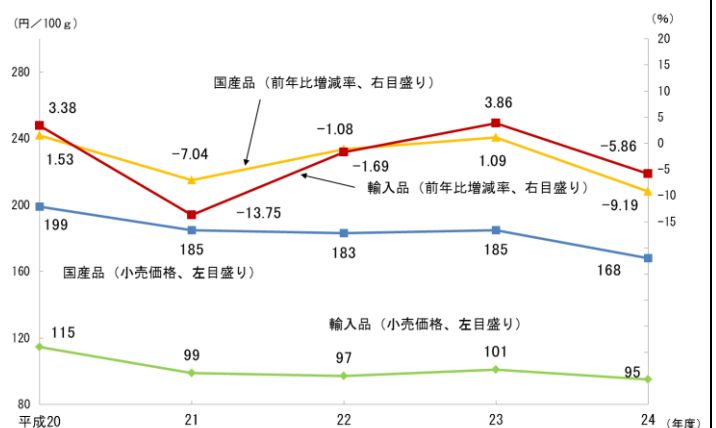
資料：農林水産省「食肉流通統計」
注1：消費税を含む
2：省令は、極上と上の加重平均

◆小売価格

24年度の小売価格(特売価格)、国産品、輸入品ともに値下がり

20年度以降の「ロース」の小売価格(特売価格)は、おおむね下落傾向で推移している。24年度の国産品は、生産量の増加、消費者の経済性志向などから100グラム当たり168円(前年度比9.2%安)と、かなりの程度低下した。24年度の輸入品は、冷蔵品輸入量が増加し供給量が増えたことや、国産品同様、消費者の経済性志向の高まりなどから、同95円(同5.9%安)とやや低下した(図11)。

図11 豚肉(ロース)の小売価格(特売価格)



資料：農畜産業振興機構調べ
注：消費税を含む